

社会情報学部の国際交流

— 高梨選手・国際結婚・‘love’ —

国際交流委員会

社会情報学部 山内春光

社会情報学部の国際交流は、2000年3月にスロベニア・リュブリャナ大学文学部と学生・学術交流協定を結んだことに始まる。早速同年から01年にかけて、最初の長期滞在（1年）交換留学生在が派遣された（この人のその後については後述したい）。それから05年までは毎年1名、多い年は2名が同様に派遣された。そして06年3月には、筆者も含めた社情教員5名がリュブリャナ大を訪れ、共同研究集会に参加した。講演も討議もこちらからはすべて日本語で行えたことが、同大日本研究講座のレベルの高さを物語っているだろう。一方スロベニアからもほぼ毎年1名、多い時は一度に3名（04～05年）社情にやって来て日本語能力を磨いていった。近年は文科省が始めた日本語・日本文化研修留學生（日研生）制度を利用し、相応の奨学金を得ながら滞在する学生も増え、さらに研究留學生制度を使って社情の大学院を出る人も現れている（もちろんこれはスロベニア人学生に限らない）。

その後イギリスのダラム大・サンダーランド大やオーストラリアのマッコリー大など、英語圏の大学と協定を結んだが、これは長続きしていない。こちらからは何人か派遣し、めざましく成長して帰って来てくれたが、先方から日本語を勉強しに来てくれる人がほとんどいなかった。この辺りに、本学部国際交流の弱点・課題があると言えよう。英語圏では、現在全学協定となったアメリカ・サンディエゴ州立大学に2名、長期派遣している。

また台湾の東海大には数名、台北教育大には1名、長期派遣している。さらに韓国の建国大にも3名が、長期留学している。ヨーロッパでは、ハンガリーのカーロリ大、ポーランドのヤギェロン大、クロアチアのザグレブ大と交流協定を結んだ。またイタリアのフィレンツェ大に全学協定で4名、長期派遣している。台湾やハンガリー、ポーランドなどからは、近年は毎年10人前後の交換留学生在が社情に来て、熱心に日本語を学び、ゼミなどにも参加している。ゼミに外国人学生がいることによる、日本人学生への確かな教育効果を、社情教員の多くが共有しているものと思われる。まずは外国人の友達を持つことが国際化への第一歩、を実践していると言ってよいのではないだろうか。

さて、振り返ってもう少し具体的に目に見える成果を、期待されているのかもしれない。簡単に答えられることではないが、冒頭に紹介したスロベニアとの交換留學生の内、3人の事例を紹介したい。

昨17年3月、筆者は11年ぶりにリュブリャナを訪れ、04～05年に来日留学したPさんそして最初の派遣留學生Nさん、と再会した。Pさんからは「いま高梨沙羅さんのスタッフもやってます」と言われ、高梨選手のW杯50勝を伝える新聞記事を渡された。高梨選手のゴールにPさんが写っているという。思えばスロベニアは、スキーのとくにジャンプ競技の大国である。スロベニア語と日本語に堪能であれば、うってつけの仕事だろうと納得した。Pさんは法廷通訳士の仕事もしているとのこと

あった。またNさんは留学後、2002年のサッカーW杯で来日したスロベニアチームの通訳を務め、その後もスロベニア語・スロベニア人と深く関わり続け、現在はツアーガイドをしながら、スロベニア人男性と結婚し子供さんも二人さずかって、リュブリャナに在住しているという。Nさんの劇的な人生の展開に思わず溜息が出た。

もう一人、いま社情の研究留学生として大学院修士2年に在籍しているMさんを紹介して、本稿を閉じたい。Mさんは学部の交換留学生として来日し、その後一旦帰国してリュブリャナ大を卒業したあと、再び社情の大学院に進学した。そして修士論文を書き、修了後の就職先は群馬銀行に内定している。昨秋、この二三年で定着したスロベニア短期留学（2週間）を紹介するイベントがあり、そこでMさんが、スロベニアを案内するプレゼンをした。そのとき筆者が初めて知ったことがあった。スロベニアは国名を英語表記したときに、唯一‘love’が入る国だという。‘Slovenia’である。日本語表記だけでは気づけていなかった。国際交流にある程度の英語は必須である、言うまでもないことではあるが。